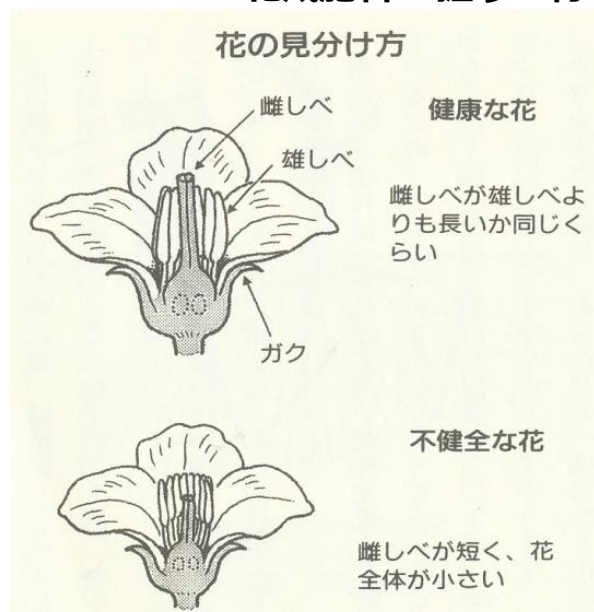


ナス (ナス科)

初夏の管理

収穫と剪定	○ナスは収穫しながら剪定していくと順次花が咲き、続けて収穫できます。 ① 3本仕立て、または2本仕立てにしていくと、葉ごとに花が咲き、実ができる。 ② 実を収穫すると、わき芽が伸び出して花が咲き、実ができる ③ 実を収穫した後、実の下を1枚残して剪定する。 ④ 残した葉からわき芽が伸び、花が咲く。 そして2～3週間で実ができると、収穫する時、実の下を1枚残して剪定する。 あとはそれを繰り返していく。
栄養状態の確認	○ナスの花は栄養状態によって花の形が変わります。 栄養状態がよいと、めしべの長い花(長花柱花)になる。 反対に栄養状態がよくなかったり、たくさんの果実をつけている場合は、めしべの短い花(短花柱花)になる。 めしべの短い花が咲き始めると、早めに追肥したり、かん水して土の中の肥料分を根から吸収させてやる必要がある。 実がなりすぎた時は若取りして負担を軽くしてやるとめしべの長い花が咲いてくる。
肥料	○根はどんどん伸びていきます。 月に2回 1㎡あたり 30g (一握り)。 株が大きくなってくると根も伸びる。 肥料を吸収する部分は先端部になる。 施肥は株元ではなく、根が伸びている「畝の谷」の部分に施す。

- ・施肥の目安 堆肥：スコップ1杯：2kg、苦土石灰1握り：約40g、
化成肥料1握り：約30g、1つまみ：約2g



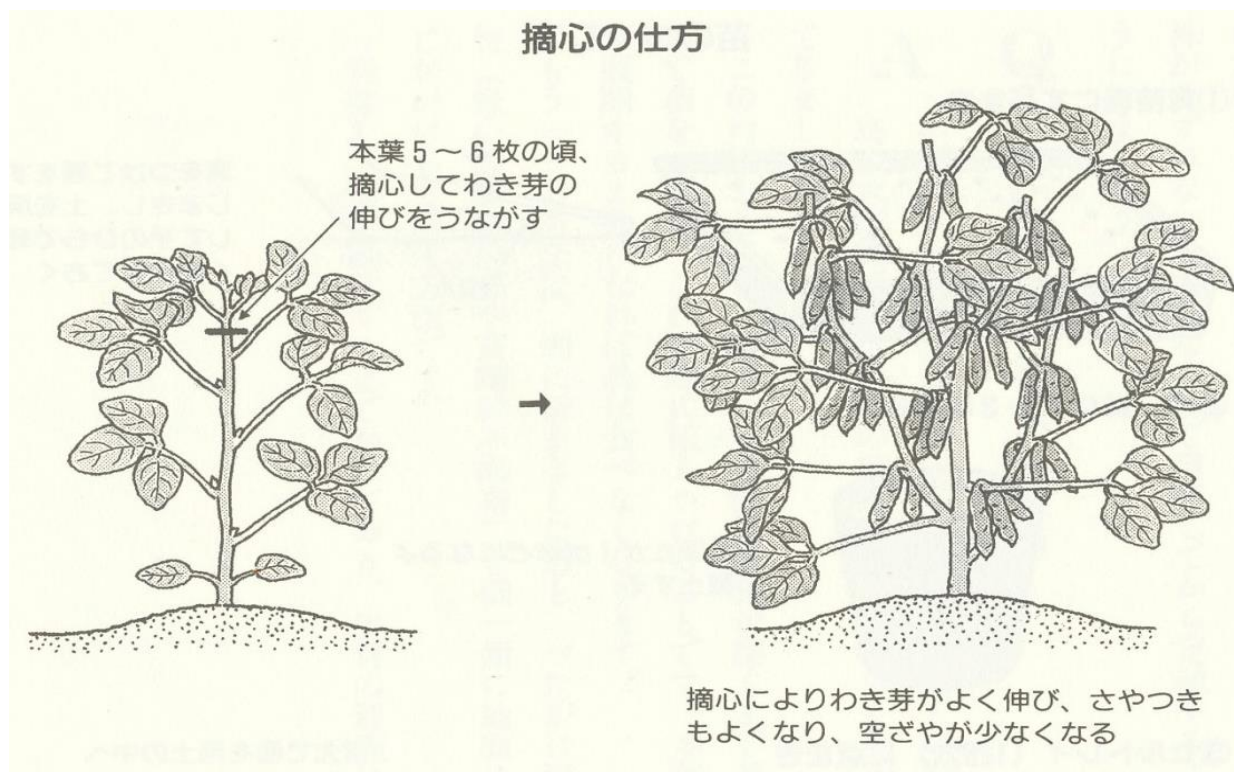


エダマメ（マメ科）

特 徴	エダマメは大豆の若いさやを枝つきのまま塩ゆでして食べる ところから付けられた名前です。 タンパク質やビタミンA、B、Cを多く含みます。 できるだけ日当たりの良いところを選びます。
播種の時期	5月下旬～6月上旬 7月下旬～8月中旬
土の準備	2週間前 耕起：30cm 苦土石灰：100g/m ² 最適 pH：6.0-6.5 2週間前 発酵牛糞堆肥：2 kg/m ² 数日前 化成肥料(8-8-8)：100g/m ² 畝の高さ：15cm
発芽難度	容易
播 種	①条間(蒔く幅)20cm、株間 25cm で3粒ずつ点まきする。 2 cm ほど覆土する。 ②種が流れないように注意して、たっぷり水やりする。
定植後の管理	発芽して本葉が2枚になったらよい株を2本残し、生育のよくないものを1本間引く。 ※エダマメはさやの中に入っている豆の数(2～3粒)をまくと発芽とその後の生育が良くなる。 その時に双葉がかくれるぐらいに土寄せする。 本葉6枚のところに摘芯(芯止め)し、わき芽を伸ばすようにすると、株がしっかりしてさや付きもよくなる。 その時期にリン酸やカリの多い肥料を1 m ² あたりふた握り施す。

収 穫	さやが、ふくらみ、押すと豆がとびだす頃が収穫適期。
注意点	ハト避けのため、種まき後、本葉が出るまで、べた掛け資材をかける。または、育苗ポットで育苗し、本葉が出たころに畑に定植する。この場合も3粒まきにして育てると生育が良くなる。
害 虫	(害虫名：カメムシ類) ベニカベジフルスプレーなど

- ・施肥の目安 堆肥：スコップ1杯：2kg、苦土石灰1握り：約40g、化成肥料1握り：約30g、1つまみ：約2g

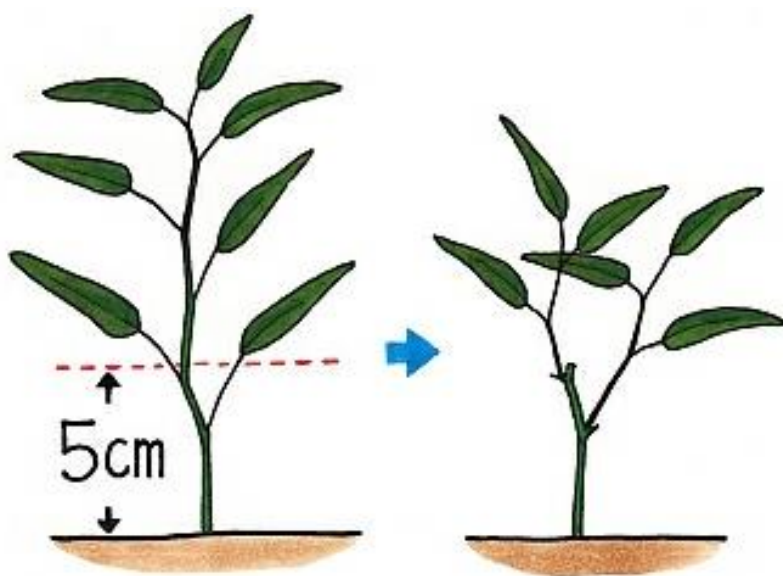


クウシンサイ(空芯菜、エンサイ) (ヒルガオ科)

特 徴	中国南部、東南アジア、インドなどの熱帯アジアを中心として栽培されているヒルガオ科のつる性一年生の葉菜です。高温多湿下でよく成長し、収穫しても次々にわき芽が伸びてきます。また、 さし芽で簡単にふやす ことができます。菜類の不足する夏に、中国では ホウレンソウの代用 として重宝されています。	
播 種 の 時 期	5～8月	7月～10月

土 の 準 備	1ヶ月前 耕起：30cm 苦土石灰：100g/m ² 最適 pH：5.5-6.5 2週間前 乾燥牛糞堆肥：2kg/m ² 数日前 化成肥料(8-8-8)：100g/m ² 畝の高さ：15cm
発 芽 難 度	普通
播 種 前 の 種 の 処 理	種は種皮が硬いので、種をまく前日、一晚、水に浸けて十分に吸水させてから蒔く。
播種時の注意	・板切れで 30cm 間隔で約 1 cm の窪みをつけ、3粒ずつまく。 ・たっぷり水やりする。
播種後の管理	・1週間ほどで発芽する。発芽したら2株残して間引く。 ・1ヶ月に1回、1m ² に一握り追肥を施す。 ・草丈が 20cm ほどになったら、株元を 5 cm ほど残して収穫する。以降は、切り取った部分の下の葉のところから脇芽が出てくるので、肥料切れに注意しながら 20～30 cm にわき芽が伸びるたびに、順次摘み取って収穫する。

- ・施肥の目安 堆肥：スコップ1杯：2kg、苦土石灰1握り：約40g、化成肥料1握り：約30g、1つまみ：約2g



夏野菜の管理作業(2)

<6月の管理は雨次第>

年によりますが関西では6月上旬に梅雨入りすることが多いです。

6月の晴天の日はじゃがいもやタマネギの収穫、またトマト、ナス、キュウリなどの夏作物の手入れと忙しくなります。

<収穫適期>

- ・じゃがいも：地上部が黄色くなる
- ・タマネギ：80%位の株が倒伏した時

晴天の日の午前に掘り取り、午後3時頃まで畑でざっと乾燥させてから収穫するとよいでしょう。

吊しタマネギには大玉よりも中玉を使うようにします。

➡ 大玉は中玉よりも日持ちが低いため

トマト、ナス、キュウリなどの夏作物の生育適温は20～25℃で、6月の気温は夏野菜の生育に最も好適な時期といえます。梅雨の季節で、適当に雨が降ってくれるので作物だけでなく、雑草や病害虫にとっても非常に好ましい季節です。

4～5月に植え付けた苗は一段と大きくなり、6月には収穫が始まります。

実がなり始めると作物体内の養分は実に集まりやすくなります。

生育状況や葉色を見ながら半月程度の間隔で追肥を行い、樹勢の維持に努めます。古くなって黄色味を帯びた下葉は摘み取って地際部の風通しを良くします。

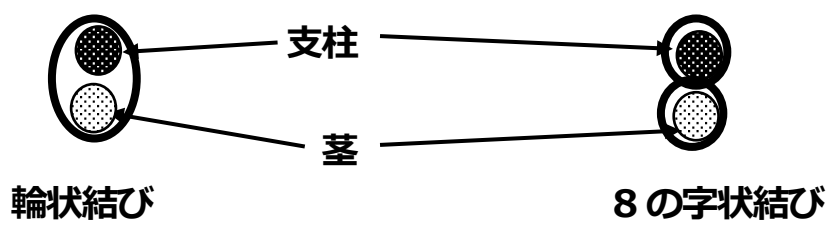
伸びてきた主茎は支柱に誘引し、倒伏しないようにします。

支柱へ誘引するのは作物体の葉を立体的に配置して地上に降り注いだ太陽光を有効に利用する、面積あたりの収穫量を増やすなどを目的として行われます。

誘引方法は栽培途中で作物体が支柱からずり落ちないのであればどんな方法でも構いません。

支柱にくくりつける方法としては①輪状、②8の字状、の2つがあり、どちらを使うかは個人の好みです。

管理作業は晴天の日に行い、曇天や雨天の日の作業はなるべく行わないようにします。



植物の病気は病原の感染経路からみると、**土壌伝染性病害**、**空気伝染性病害**、**汁液伝染性病害**に大別することができます。

土壌伝染性病害にはナス科の青枯れ病や萎凋病、アブラナ科の根こぶ病、多くの野菜で発生する苗立ち枯れ病などがあります。通例、最初に発生した箇所から雨水の流れに沿って病害が広がっていきます。発病株を見つけたら株だけでなく土中の根などもなるべく丁寧に取り除き、可能なら周辺の土もあわせて取り除いて廃棄します。土壌伝染性病害は発生してからの防除は困難です。土の多湿や過湿が一因ですので、露地栽培では難しいのですが土をなるべく乾燥状態に保つのは病害の蔓延を防ぐうえで有効な対策の一つです。土壌伝染性病害は一度発生すると土壌中に病原菌が残り、翌年以降も発生しやすい傾向があります。不運にも発生した場合は翌年はまったく種類の違う野菜を植えたり、病害抵抗性台木に接ぎ木した苗を植えるなどの対策をとります。

空気伝染性病害はさび病、うどんこ病などが代表例です。雨が多くて湿度が高く気温が 20-25℃程度の梅雨期の気象条件は空気伝染性病害の発生や蔓延には最適の条件といえます。発生したら、晴天日の夕方に発病部位を含む株全体に登録のある殺菌剤を丁寧に散布します。

汁液伝染性病害の代表はウイルス病です。わき芽摘みや誘引を行った際に手に付着したごくわずかな汁液から伝染していくものもあるので、感染株はなるべく早くに処分します。

春から秋に発生する害虫の年間を通した**発生のピーク**は 6-7 月頃で、盛夏期は暑さのため密度が低下し、**秋に再び低めのピークを迎えるのが一般的なパターン**です。対象害虫の例年の発生時期や発生初期に登録のある薬剤を散布して被害防止に努めます。

アブラムシやダニなどの微小害虫の防除は薬剤に頼るところが大きいのですが、**同じ薬剤を続けて使用していると薬剤に対して抵抗性を示す個体が出現してくるので作用機作の違う薬剤を 2-3 種類用意して交互に使用したり、油膜で害虫を覆うタイプの殺虫剤(商品名：アーリーセーフなど)やでんぷんで粘着させたり虫を覆って死滅させるタイプの殺虫剤(商品名：粘着くん)を使用するとよいでしょう。**

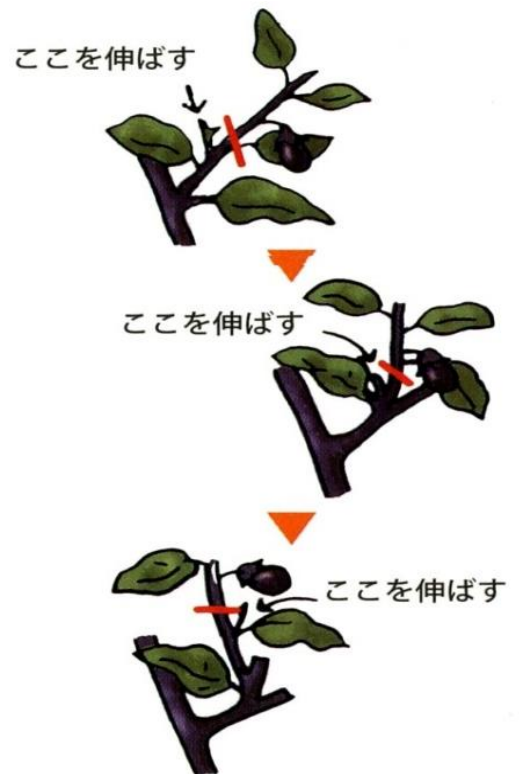
キュウリ、トマト、ナス、スイートコーンなどはカラスの食害に遭うことがあるので被害にあった場所では防虫・防鳥ネットを被せる対策をとります。

夏野菜の管理(その 2)

ナス (ナス科)

- ・ **収穫と剪定**(復習になります)

－3 本仕立ての場合－



・ **切り戻し(更新剪定)**

8 月上旬になって実つきが悪くなってきたら、思い切って切り戻す。

- ① 収穫の最盛期を過ぎるとわき芽が出てこなくなるので、花が咲かなくなり結局、実つきが悪くなる。(8 月上旬頃)

② 3 本仕立て(2 本仕立て)

の場合、各枝の葉を 1～2 枚残して切り戻す。

- ③ 地上部を切り戻したら、株元から約 30cm 離れたところにスコップを深く差しこんで根を切る。このことによって地上部と、地下部のバランスをとる。

- ④ スコップを差し込んだところに緩効性の肥料(約 30g)を施用する。

- ⑤ 根を切ったところから新しい根が出てくる。地上部はわき芽が伸びてきて花が咲く。

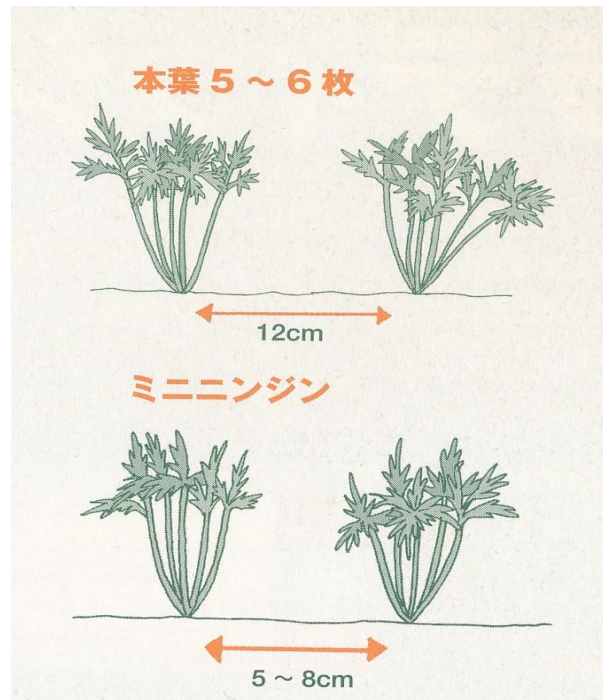
*このようにすると 10 月下旬まで順次、実を収穫することができる。



ニンジン（セリ科）＜播種（露地）＞

特 徴	春まきが多いですが、秋まきでも冬春にかけて収穫できます。 日当たりがよく水はけの良いところを好みます。 ミニニンジンは生でサラダなどに使えます。
播 種 の 時 期	8 月中旬～9 月下旬 収穫 12 月中旬～3 月上旬
土 の 準 備	1 ヶ月前 耕起：30cm 苦土石灰：150g/m ² 最適 pH：5.2-6.5 2 週間前 乾燥牛糞堆肥：3kg/m ² 数日前 化成肥料(8-8-8)：100g/m ² 過リン酸石灰 ： 30g/m ² 畝の高さ：20cm
発 芽 難 度	難
播 種 前 の 種 の 処 理	・タネを一昼夜水に浸して吸水させ発芽しやすくする。
播種時の注意	条間 20cm ですじまきする。薄く覆土する。 ニンジンの種子は「好光性」といって、土を厚く覆うと発芽しにくくなる。フルイなどを使ってごく薄く土がかくれるほどでよい。タネをまいてその上を、トイレットペーパーかティッシュペーパーで覆うと水やりの時タネが流れにくく、発芽する頃にはペーパーは水に溶けてしまっている。
播種後の管理	・発芽したら混み合うところから間引き始め、本葉 5～6 枚で 12cm の株間にする。ミニニンジンなら 6～8cm にする。 ・月 1 回 50g/m ² の肥料をまく。 ・ニンジンの肩が見えてくると緑になるので土寄せする。 ・タネをまいてから 100 日頃が収穫の目安。ミニの場合なら 80 日前後 ◎間引いたニンジンは葉の部分はニンジン葉としてサラダやスープの愚にできる。
病 気	うどんこ病：重曹
害 虫	キアゲハの幼虫等
そ の 他	他の作物とコンパニオンプランツになる。

ニンジンの間引き



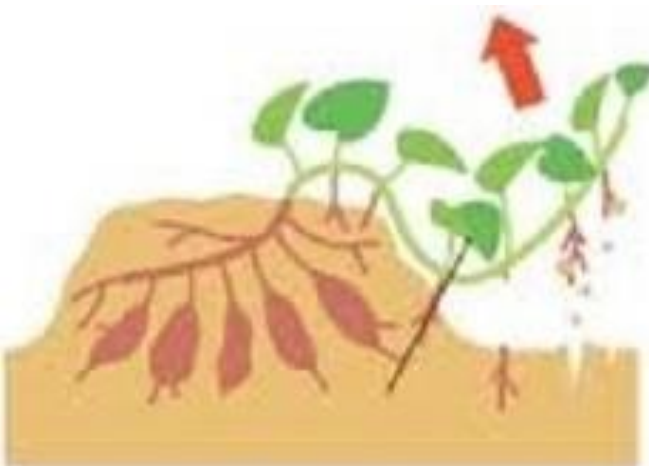
サツマイモ(ヒルガオ科)

・つる返し

サツマイモは元気に生育しながらいろんなところの節から根を出します(不定根)。

そのままにしておくと、そこから肥料分を吸収して、養分過多になります。これを防ぐために、「つる返し(つる起こし)」をします。

肥料はやらない！株元以外の根を土から離す



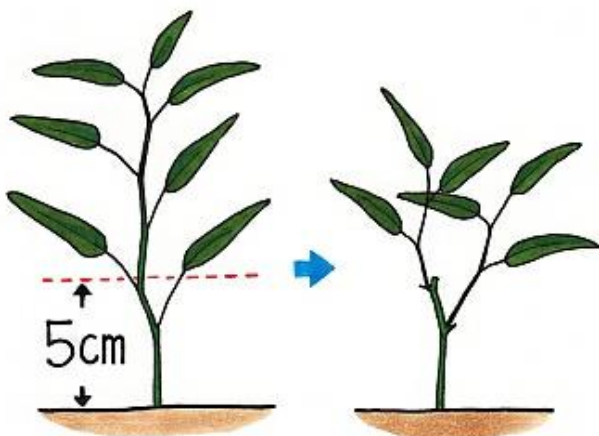
つるの節から出てくる不定根が根付かないようにつるを持ち上げて「つる返し」をする

施肥の目安

堆 肥	スコップ 1 杯で約 2kg
苦土石灰	1 握りで約 40g
化成肥料	1 握りで約 30g
(その他)	1 つまみで約 2g

クウシンサイ(空芯菜、エンサイ) (ヒルガオ科)

特 徴	中国南部、東南アジア、インドなどの熱帯アジアを中心として栽培されているヒルガオ科のつる性一年生の葉菜です。 高温多湿下でよく成長し、収穫しても次々にわき芽が伸びてきます。また、さし芽で簡単にふやすことができます。菜類の不足する夏に、中国ではホウレンソウの代用として重宝されています。
播 種 の 時 期	5～8月、7月～10月
土 の 準 備	1ヶ月前 耕起：30cm 苦土石灰：100g/m ² 最適 pH：5.5-6.5 2週間前 乾燥牛糞堆肥：2kg/m ² 数日前 化成肥料(8-8-8)：100g/m ² 畝の高さ：15cm
発 芽 難 度	普通
播 種 前 の 種 の 処 理	種は種皮が硬いので、種をまく前日、一晚、水に浸けて十分に吸水させてから蒔く。
播種時の注意	・板切れで 30cm 間隔で約 1cm の窪みをつけ、3粒ずつまく。 ・たっぷり水やりする。
播種後の管理	・1週間ほどで発芽する。発芽したら2株残して間引く。 ・1ヶ月に1回、1m ² に一握り追肥を施す。 ・草丈が 20cm ほどになったら、株元を 5cm ほど残して収穫する。以降は、切り取った部分の下の方の葉のところから脇芽が出てくるので、肥料切れに注意しながら 20～30cm にわき芽が伸びるたびに、順次摘み取って収穫する。



夏野菜の管理(その2)

1. 追肥

4～5月に植え付けた夏野菜類は順調に生育が進むと草丈も伸び、収穫が始まる頃です。夏野菜は果実を収穫する野菜が多く、果実が肥大を始めると植物体内の養分は果実に集まるので早めに追肥を行います。

追肥の効果



- ・ 樹勢の維持
- ・ 幼果の肥大を促す

追肥には速効性の製品を使います(化成肥料、液肥など)。

- ・ 一度に与える量は樹体の大きさにもよりますが固形化成肥料(8-8-8)なら 1/2 つかみほどとし、追肥後の生育の様子、果実の肥大速度、葉の色などを見ながら追肥間隔を調節すると良いでしょう。

2. 整枝

茎の伸長とともにわき芽が伸びていきます。野菜の種類に応じてわき芽を適切に管理し、収穫量を多くするように努めましょう。

作業は晴天日に行い、夕方までに芽かきなどを行ってできた植物体のキズ口が乾燥してしまうように心がけます(キズ口からの病原菌の感染を抑えるため)。また、主枝の頂芽やわき芽は小さい間に摘心したり取り除くとキズ口が小さくてすみ、キズ口からの病害感染のリスクを抑えることにつながります。

<トマト>

大玉あるいは中玉トマトではわき芽はすべて摘み取ります。主枝は180cmの支柱を使う場合で6段果房の上に葉を1-2枚残して摘心します。

ミニトマトでは4段めの果房よりも上から発生したわき芽のうち、元気のいいのを1-2本伸ばし、主枝と同じように管理すると11月頃まで収穫することができます。

<キュウリ>

主枝は支柱の高さに達しそうになったら摘心し、主枝から伸びたわき芽は2-3節めで摘心、わき芽から発生した孫つるも2-3節で摘心します。

春に植えたきゅうりは梅雨明け頃までには収穫がほぼ終わります。

8月中旬頃になると苗が出回りますので植え付けると9月中旬収穫開始、10月下旬頃まで収穫できます。

3.病害虫防除

梅雨期の気温や湿度は病害や害虫にとって好適な環境条件です。市民農園で過去に発生が多かった病害虫は以下のとおりです

<ウイルス病>

ウリ科野菜では新葉の緑色がまだら模様となり、以降に出てくる新しい葉もまだらになります。トマトでは葉身が細くなりねじれた様になったり、葉色が黄色くなったり、葉にモザイク症状が発生します。

ウイルス病に感染すると治癒、回復の方法はありません。また、アブラムシによる吸汁により周辺の健全な株にも伝搬しますので見つけ次第、株は廃棄します。

<ナス科野菜の青枯れ病>

降雨があった翌日以降の晴天日に、日中は萎れるが夕方から朝はやや萎れが回復し、次第に萎れの程度がひどくなり数日内に萎れが回復しなくなります。

病気の進行が早く、植物体がまだ緑色を帯びているのに枯れあがることからこの病害名が付けられました。

土壌中にいる病原菌により発生する病害です。

発生に気づいたときには手遅れのことが多いです。発生株はなるべく早く引き抜いて処分します。降雨時の土中の水の流れにしたがって健全な株に感染を広げていくことがあります。

発生した場合は2-3年間はナス科野菜の植え付けを見合わせます。

どうしても植え付けなければならない場合は接ぎ木苗を植えるようにします(接ぎ木苗でも病気が発生することがあります)。

<ウリ科野菜のウドンコ病>

下葉から発生することが多く、葉の表面に白い粉のようなカビが発生します。風通しが悪かったり窒素肥料を与えすぎると発生が助長される傾向があります。

発生を見つけたら、被害葉や混み合っている部分の葉を取り除きますが、葉を摘み過ぎると生育が衰えるので注意します。

晴天時にカリグリーン等の殺菌剤を葉に付着している白い粉を洗い流すようにていねいに散布するとまん延を抑えることができます。

<アブラムシ>

新芽近くに発生することが多いです。①でも触れたようにウイルス病を媒介しますので見つけ次第、登録のある殺虫剤を散布して駆除します。